☆わたしの意見

第三の県政を

坂井　時忠
〈兵庫県知事〉

あさみどりの風に新春（はる）の旋律鳴り
兵庫改創の晨（あした）むかえぬ

あけましておめでとうございます。

兵庫県の大地に、さわやかな緑の風が新春のハーモニーを奏で、ここに兵庫県を改造し、創造する夜明けを迎えました。

昭和五十年――みなさまのご多幸を心からお祈りいたします。

昨年の知事選挙では、中国の名言になぞらえ〝私は鍋になりたい〟――と訴えました。

それは、地方自治の本旨を護りぬくための自戒の弁でもありました。

『水と火は、常にあいいれない存在である。火は水の敵、水は火の敵。しかし、その間に鍋をおくことによって、お湯がわき、おいしい料理ができる。私は、この鍋になりたいと願っている。』

保守と革新、右と左。それはあいいれない存在であり別の世界かもしれません。

それでも、そこに〝鍋〟があれば両立するし、その協力によって、第三のしあわせが生まれてくるのです。

私は「県民党」を堅持し、県民のしあわせづくりに献身したいと決心していますが、この激動の時代に処する道は〝愛の中道政治〟――第三の道――以外にないと確信しているのです。

私は鍋になって、保守でもない、革新でもない、第三の県政を樹立したいと念じています。

県民のみなさんのご協力を、心からお願いいたします。

謹賀新年

今年もよろしくお願いいたします

オリエンタルホテル

六甲オリエンタルホテル

随想三題

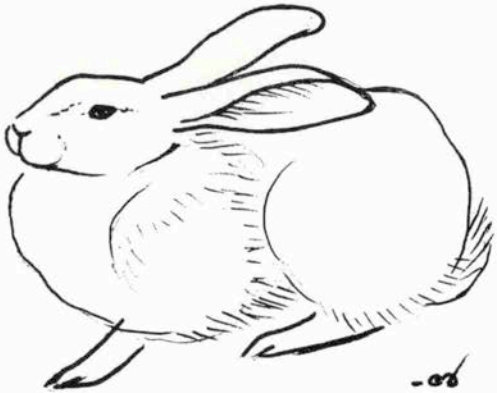
われらうさぎ年

大橋　良三
〈日本画家〉

昭和五十年は乙卯の年。丁度六十年前の大正四年乙卯五月五日が私の誕生日である。端午の節句に男子が生まれたというので、父の喜びようは大変だったと、後年よく聞かされた。また大正四年は大正天皇のご大典の年、中学へ入学した昭和三年は今上陛下のご大典の年である。

中学時代、担任の先生から「お前らはご大典学年だ。おめでたいばかりで頭が悪い」とよくどなられた。おめでたいことも、頭の悪いことも事実だが、卯年の人間は〝性従順で温和、上長に愛されて幸運に恵まれる〟そうだ。その後がいけない。〝ただし色に苦労する〟とある。どっちの色かわからぬが、今のところ私は日本画家だから、絵の方の色で苦労しているとでもしておきたい。

おめでたいついでに〝一家に三兎あればその家は栄える〟という。私に姉の主人、妻の兄と二人の義兄がいる。姉の方は一廻り上の卯年、妻の兄は私より一廻り下の卯年である。私をはさんで、一廻り上と下に義兄がいるとは妙な話だが、まずはおめでたい事である。ただし、家の繁栄は嘘であった。



え・大橋良三／県日本画家連盟委員長・49年度県文化賞受賞

およそ兎ほど平和な動物はいない。鳩は平和のシンボルというがそれは姿かたちからいうもので、本当は、かなり戦闘的で排他的である。〝三枝の礼〟といっても、近寄れば突つかれるから近寄らないだけである。その点兎は実に柔和で可愛いい。怒ることを知らず踏まれても蹴られても泣き声一つたてず、昇天しては月に餅つく兎となる。その月に人間が行って、われわれの夢を無惨にも打ちくだいてしまったが――。

今から四十年前になるが、私が父にさからって京都絵専に入学したとき、伯母、叔父その他の親類縁者が集って親族会議が開かれ、その真中に座らされた。「絵かきになるのをやめて、三味線屋になれ」と四方八方から説得された。「三十年の老舗（しにせ）をつぶす気か」とか、「三味線屋の方が一生食うに困らない。絵が好きなら、三味線屋をしながらでもできるではないか」とか、甘い言葉、きびしいことば、さまざまの説得

が私のぐるりを飛び交った。それでも私が「どうしても学校へ行きたい」と頑張ると、「良三は飼兎のようにおとなしい子や思うたら野兎のようにどえらい子やな」と最後に伯母が、憮然としたように言っておしまいになった。

卯年の人間は、表面はおとなしいが、仲々一本筋が通って、思いこんだら梃子でも動かぬ頑固なところがある。それでいて、移り気で優柔不断で、向っ腹立てのくせに経済観念はゼロである。愛すべきよき年男(年女)と思うが如何。

今年はまた今上陛下即位五十周年奉祝の年でもある。世界に類のない、日本史上でも最長の在位であり年号である。

卯年の人びとよ、相ともにこのめでたいおらが春を、寿ごうではないか。

ふるさと考

中村　隆
〈詩人〉

小学生の頃、つがいの兎を飼った。縫いぐるみのおもちゃのような生き物が、わが家の一員になったときは狂喜したが、父との固い約束には気が重かった。それは餌のオカラを毎朝豆腐屋に買いに行くことと、小屋の掃除である。六時前に起きて一キロほどの道を、鍋一杯のオカラを抱えて走って帰り、臭いミカン箱の小屋をきれいに掃除してから、ぼくの一日が始まるのだ。それでも初めの一月くらいは、誰の手も借りず父母を驚かせたものだが、やがて寒い冬が訪れ早朝作業もだんだん重荷になってきた。三ケ月も続かぬうちに知り合いの農家で飼ってもらうことになった。だが、その短い期間の印象は強烈で、今でも湯気を立てるオカラの匂いがなつかしく甦ってくる。あんなに素朴で、生活の匂いがする食べ物は、もう口にすることがない。そして霜柱の立つあの坂道も、板ベイも、ヒヨドリの鳴き声も、豆腐屋の鐘の音も今はない。

戦後の都会育ちの子供たちには故郷がないと言われる。スモッグの空の下の、冷たいコンクリートの檻の中で育った子供たちに「ふるさと」とは何だろう。ぼくも都会で育ったので「兎追いしあの山子鮒釣りしこの川」と唱うような故郷は知らないが、それでも都会の中にふるさとはあった。山ももの実る山や、モロコを掬った池や、遠浅の海があった。森には百年も経ったような楠の木が枝を拡げ、広っぱには毎年同じ場所に摘みきれないほど土筆が顔を出した。ぼくの記憶の背景に広がるそんな風景も、やがて焼きつくされ灰になったが、更に悪いことには戦後二十数年がかりで狭い国土はセメントですっぽり覆われてしまった。山も川も海も、削り取られ、埋め立てられ、固められ、ぼくたちの眼の前の風景は一年毎に変貌し続けるのだ。

「ふるさと」とはいつも変らぬ風物のことだ。いつまでも人の心に生き続けるものが、そう簡単に変えられるものではない。掘り起してばかりいるアスファルト道路から、人はどんな自分達の「道」のイメージを描くことだろうか。

「ふるさと」作りと称する為政者たちは、日本の「ふるさと」の破壊者なのだ。先日、詩人の竹中郁さんがヨーロッパを再訪された際四十数年ぶりで立ち寄ったパリの昔の下宿屋が、当時のままそっくり残っていて、思い出の部屋から灯りがもれていた時は嬉しかったと話されたが、戦争を挟んで五十年近く、何一つ変らぬパリの街に住む人たちは何と幸せなのだろう。ガスや水道や乗り物に多少の不便はあっても、市民はわが「ふるさと」をどんなに誇りに思って

いることだろう。

やさしい兎の年の初めに、もう日本の自然を破壊するのは止めて貰うよう切に訴える。息子たちには与えることが出来なかったが、せめて孫や曽孫たちには、ぼくたちの心の遺産を一つでも残して置いてやりたいと思うのだ。

わたしのなかのウサギちゃん

本城　由美子
〈関学大学院・心理学〉

私が生れたのが昭和26年、ウサギ年。その歳月の長さに驚き、そして豊かで幸せな日々を送ってきたことかと思う。よく生れた年によって性格が大きく異なるといわれますが、私自身、中学・高校・大学を通じて、いくぶんか上下の学年とは異なった特質をもっているように感じる。何となくおっとりしていて摩擦の少ない学年であり、そしてその反面、少し頼りないような、そんな特質は、可愛いウサギという干支のせいかしらと小さい頃から思っていた。まっ白で目だけ赤くって、耳をピョコピョコふりながらチョコチョコ動きまわるウサギ。ひとつ上のトラほど力強くなくておとなしく、そしてひとつ下のタツのようにははっきりした線を示さない。

私は小さな頃、童話の世界のウサギさんを何となく夢見ていた。それこそ従順で愛らしい。なのに大きくなって本物のウサギを見て少々失望を感じた私。少しばかり頽廃的で、人なつっこくなく、仲間ともあまり一緒にいない、そんなウサギ。そういえば「ウサギとカメ」のウサギは、いやにずるくて憎らしかったっけ。今になって思えば、ウサギに対する感じ方というものはすべて私自身の投影だったような気もする。だから、ウサギさんが変ったのではなくて、私自身のなかにあった童話の世界が消え、何かちがったものが生れたからでは……と思う。今の私のなかにはいったいどんなウサギがいるのかしら。

生れてから何をしてきたのだろうかと考えると、いつも顔が赤くなるのを覚える。これといってまとまったことはひとつもなく、何となく断続的に進んできたような気がする。ただその時その時をガムシャラに、思うがままに、できる限りをしてきた、ということが残っているだけのようだ。

現在はどういうわけか心理学に首をつっこんでいる私。私の一時期しか知らない人は、不思議に思うかもしれない。そんな私に残っているウサギさんの特質はいったい何なのだろうか。むこうみずに足もとを見ずに跳びはね、そして自分にはできそうもない理想のみを夢見続けるウサギ。そして、自分を過信して、後でチョッピリあわてる、そんなウサギなのだろうか。とてもカメさんのように一歩一歩着実には進めない。けれどもひとっとびが大きすぎて失敗はしても、おくれても、やはりゴールには到達するのだろう。跳びはねたことしか残らなくてもそれに満足して、それをせずにはいられないのだ。そんな私だから　ひとつひとつのデーターがいくつも集ってはじめてひとつの形を成し、着実性を要求される心理学に魅力を感じたのかもしれない。

これからの私、着実に……とはいかないかもしれない。断続的にでもガムシャラに……と思う。そして神話にでてくるウサギのような謙虚さを心にとめて、ひとっとびを振り返りながら進んでいければと思う。ただ跳びはねすぎて道から落っこちてしまわないように頑張りたい。

今年はウサギ年。

□ある集いその足あと

ひろグループ

塩見　勝茂
〈ひろ号艇長〉

レースにも酒にも強い「ひろ号」須磨沖で。

神戸須磨水族館の東側に「神戸市立須磨ヨットハーバー」があることをご存じない方も多いと思います。19年前、神戸で国体が開催された時建設され、その後は一般市民が使用、現在ヨット、モーターボート合せて二一〇隻余りが常置されております。我々「ひろグループ」のメンバーは約10年前、このハーバーに出入りして顔なじみとなった三人が、一人では到底手の届かない、夢にまで見たキャビンつきヨットを共同購入しようと相談がまとまりました。

ある者は自分の小型ヨットを売却、ある者はボーナスと貯金を全額投入して手に入れたベニヤ板製ヨットは「ひろ号」と名づけられ瀬戸内海の東部を自分の庭のように走り廻り、四年間が夢の様に過ぎました。楽しかった事、こわかった事、無知による海難寸前のおそろしい出来事、大きな魚の釣れた事、いろいろな事がありました。

そして更に大きな外洋を走れるヨットが欲しいなァ、と誰からともなくいいだし、それからは土曜日の晩などキャビンにランプを灯けて、次のヨットの研究が始まりました。半年して大体のアウトラインがきまり、メンバーを増やし、資金を増やして小豆島の岡崎造船へ新造発注。進水まで、毎日曜日出来ぐあいを見に通いました。

やっと一年後に新しい「ひろ号」が進水。長さ七・五メートル、ディーゼルエンジンつきの頑丈な、頼りになるヨットでした。それから4年間、白浜、松山、別府宮崎、鹿児島、種子島、尾久島、福岡、壱岐、対馬、釜山、高知、足摺岬とクルージングを楽しみ、魚と酒をいやという程食べ飲みました。ヨットレースにも度々参加しましたが、ヨットが頑丈すぎて重すぎて、レース結果はいつもどんじりでした。

望みはぜいたくなもので、今度は、ヨットレースで勝てる、外洋レースにも参加できるヨットが欲しいと全員一致。それからは更にメンバーを増やして次のヨット造りに挑戦、前艇同様夢がかなって、現在のひろ号が進水しました。

現在の「ひろグループ」のメンバーは八人。サラリーマン、学校の先生、商売人、学生といろとりどりの集まりで毎週土、日曜日はレース、クルージング、魚つりを楽しんでいます。相変らず魚と酒が大好きの連中ばかりで、米の積込みは忘れても酒は必ずあるという、共同オーナーヨットです。

しかしヨットレースの戦績は優秀で最近の四レースの着順も（平均25艇参加）、一着三着四着二着と頑張っており、ヨット仲間にも「ひろ号」は酒びたりのヨットかと思ったら意外だとうわさされているとか。

新春を迎え今年の目標は、年間十本程度のヨットレースに参加、上位入賞と、美味しい魚をたくさん釣ることです。来年5月に行なわれる沖縄から東京までのヨットレースにもぜひ参加したいと思っています。しかし何年海になじんでも海はこわい所で、海面が次第に黒ずんで来た時など今でもゾッとすることがあります。安全を第一としてこれからも海を愛し、いつまでも楽しいひろグループでありたいと思っています。

新発売

チョコレートパピヨット

フレッシュなバターの入った
洋風せんべいにスイートな
ミルクチョコレートをコーティング
香ばしいおせんべいの風味と
高級チョコレートの深い味わいが
まろやかに とけあった
ロマンチックなパピヨットです

古い老舗に新しい味覚

神戸元町 風月堂

本　　店・神戸元町3丁目　TEL 391－2412
さんちか店・スィーツタウン　TEL 391－3455
全国有名百貨店・名菓街・のれん街

謹賀新年

柴田音吉洋服店

神戸・元町4丁目南　神戸 341－0693
大阪・高麗橋2丁目　大阪 231－2106

わが家には一日平均五十本から六十本ぐらい電話がかかってくる。ま、仕事のが主だが、なかにはいい加減なのもある。

「私、小説のモデルにはならんでしょうか。文才があれば私の一代記をですね、是非書き残したいのですが……。なにしろ、私の人生は波乱万丈でありましてからに……」

などといってくる。

こういう手合は相手にしてもつまらない。

自分で波乱に満ちたと思っている人の方が平凡である場合が多い。いや、平凡だといいのだが、平凡以下の人生が多いものである。

こういう人は、自分を不幸にした（と本人は思い込んでいる）相手を徹底的に敵対視するものであり、自分がいかに他人からひどい目にあったかをいうものだ。

自分では平凡な生活だと思っている人が、実は大変な歴史を背負っている人がいる。

大阪の橋の下に堀立小屋つくって自炊している女のルンペンがいた。

「あんたの職業はなんというたらええかいなあ」

というと、

「へ、ルンペンとでもいうてもろたら嬉しいでんなあ。乞食でもよろしい」

という答が戻ってきたのだ。こういう手応えはぐっとくる。もの書きの三能が疼くというものだ。そこで、サバズシを肴に冷酒飲みながら、そのオバハンを取材することにした。

彼女は五十歳だ。十五の時に、佐世保の女郎屋に売りとばされた。親父が酒のみのバクチうちだ。

「父親を恨んでるか」

というと、けろりとした顔で、いいやという。

「なんでや」

「そうかて、親孝行が出来たもん」という。

「あてがでんな、もし女やなかったら、お父ちゃんに親孝行出来んかったやわかれへん。お父ちゃんは、あてを売って、お酒飲めたんやもん」
とこともなげにいう。本心からそう考えているらしい。この考えをなんととらえたらいいのだろうか。
「不幸の連続やったやろ」
というと、
「いいやァ、そんなことなかった。楽しかったよォ。不幸なんは戦地に行かはった兵隊さんらや。あてを抱いて死ぬのんいややと泣いてはった新兵さんも何人かいてはったわ」
というのであった。
彼女は平均一晩に六人の客をとったという。
そして肌は健康で、とても五十歳と思われないつややかさである。これは一体どうしたことなのかと彼女に訊ねてみたら、
「苦労がないさかいやねえ」
ときた。
何千人の男に肌を許して「苦労」でも「不幸」でもないという思想を一体なんと理解すればいいのかとおれは迷った。
「なんにも欲しがらへんわけやねんで、あては……」
という。無欲の勝利みたいな感じがしたものだ
「なんにも疑えへんし……」ともいう。猜疑心なく無欲であるのが精神衛生上で一番いいというのだった。
そして、
「平凡な人生や」
といったのだった。
「この上で……」
と、彼女は橋の上を指したのだ。
「昨夜(ゆんべ)も喧嘩して血だらけになった人もいてるし、今朝方は、交通事故で死にはった人もいてたし……」
というのだった。
「なんにも慌てて生きていくこともないしなあ」
という。
「賢いさかいに働かないかんのやなあ、きっと……」といい、ゆっくり地球にへばりついてたらよろしいのにともいったのだった。
「死ぬ時は誰でも死ぬのやさかいなあ……」
ともいった。
「これ、取材料や」
と五千円渡すと、彼女はびっくりしていったものだ。
「喋っただけでお金をもらえますのんかァ、今頃は……」
という。そして、これでは悪いから、あての体を……」といい出した。
「これから風呂屋に行ってくる」
と、本気なのだ。
「いや、オバハン……」おれは愕いた。そしてこの厚意をなんとか辞退しようと思い、
「実はな、おれ、一寸な、淋しい病気や」
と性病を匂わすと、
「そう、いかん。これで治療せえな、兄ちゃん」と五千円を返すのだった。が、とにかく置いてきたら、その翌日、オバハンが、テレビ局にやってきて、
「お礼に大掃除させてほしい」というのだった。いや、おおきにと礼をいって、このオバハンは童女なのか天女なのか阿呆なのかと迷いに迷った。

□神戸情話〈7〉

ワンナイト芦屋

矢崎 泰久
〈話の特集編集長〉
え・小西 保文

その店は、いやに細長い造りであった。入口のところにレジとジューク・ボックスがあって、高級というイメージには程遠い。狭い通路をはさんで、小さな椅子とテーブルが、いかにもゴチャゴチャと置かれている。奥のカウンターふうのバーの前に、ピアノが一台あって、学生ふうの若い女が、どうでもよさそうに、ポピュラーな曲を弾いていた。

「山ちゃん、ここが君のいう、芦屋の面白い店なのかい」私は、がっかりしながらいう。

山ちゃんはテレビ・ディレクターで、社会探訪と称して、私を誘っては、いろいろなところをよく案内してくれる。これまでにも、六甲の秘密クラブとか、明石のワイルド・パーティとか、どこから探してくるのか、夜の情報にかけては、なかなか通じている。四回ほど彼の案内で遊びに行ったことがあるが、結構楽しんで帰ったように思う。その夜も、仕事が終ってロビーでタバコを喫っている私に、

「芦屋へ行ってみませんか。おもしろいところがありますのや」という。別にこれといって予定のなかった私は、久しぶりに山ちゃんと車に乗った。

もともと、私の頭の中にある芦屋は、ひっそりとした高級住宅街であって、例によってマンションの一室を利用した秘密パーティかなんかを探してきたのだろうぐらいにしか考えなかった。商店街を抜け山側へ二百メートルぐらい行ったところに、目立たないスナックがあって、山ちゃんは「着きましたよ」という。それがこの店であった。

「ここがどうかしたのかい。どうという店でもないじゃないか」と私。

「まあ、あわてないでください。これからですよ」と彼がいう。

軽い酒を注文して、しばらく時間をつぶしていると、店が急に混みはじめた。気をつけてみると、たいていの客が、女性の二人連れか、三人連れであった。

「いよいよですわ」と山ちゃんがニヤリとする。私には何のことかさっぱりわからない。

「いい身なりしとるでしょうが」山ちゃんが声をひそめていう。

改めて見てみたが、決して貧しくはないけれど、別にすごいというほどの豪華さでもなかった。第一、この店の雰囲気が、いかにもしんきくさいのである。しかし、普通でないことが、ようやく私にもわかってきた。それは、客と思われる女性たちが、私たちの方をチラチラ見る。その眼の配り方が、どこか自然ではないのである。

「芦屋の有閑マダムたちですよ。よりどり見どり、気に入ったのがいたら、ぼくが声をかけてきます」と山ちゃんがニヤニヤしながらいう。私も、ようやく事情がのみ込めた。

若い女は二十代の後半くらいで、年配になると五十才にはなっていると思える女性もいた。肌の色つやがよく、どこか気品があった。歌手の沢たまきに似た、ちょっと倦怠した感じのムードを漂よわせている三十才くらいの女性を、その中に見つけて私はいった。

「あれは悪くないね、山ちゃん」

「オーケー。あんた好みと思ったよ」山ちゃんはスッと席を立って、レジのところにいるこの店のマダムらしい女に何か耳打ちした。しばらくして、マダムが山ちゃんに目配ばせする。

「ほな、ここで別れましょう」山ちゃんは、私の手に一個のキイと紙片を渡しながらいった。紙片には、この店の近くのマンションの地図が印刷されてあった。私は外へ出た。夜風が私を包み込んだ。

そのマンションは、すぐわかった。部屋は七階の二号室。中へ入るとすでに暖房が行きわたって高級品らしいソファの前には、グラスと酒が用意されてあった。

五分くらいすると、例の沢たまきに似た女が入ってきた。

「あら、まだ上衣も着たままですのね。くつろいで下さいな。よかったらバスお使いになって」

しっとりした口調である。彼女は私にオンザロックを作ると、別室に入って薄い部屋着を身につけて戻ってきた。スタイルのいい、どちらかというとほっそりした体に、豊かな乳房がいかにも挑発的であった。

私が、マンションを出たのは、東の空が白みはじめたころである。眠りに落ちて、気づいてみると、隣にいた女の姿はすでになかった。すでにテーブルに書置きがあって、そこには自動ロックだから、いつここからお帰りになっても心配はないといったような事務的なことが伝言されてあった。

翌日、山ちゃんに三の宮であった。私は気になっていたことを早速きいた。それは、いろいろな意味でお世話になりながら、私は、それこそビタ一文もお金を使っていなかった。少なくとも相手の女性にどういう形でいくら支払ったらいいか。

「そこがええところですわ。こっちも浮気なら先方も浮気。あそこへ集まってくるママたちは、みんなであのマンションのワン・フロアーを借りとるんや。心配せんでええようになっとるんやで……」

遊びのスケールが違う。私は相手の名も知らない。無駄な会話も一切しなかった。もしかすると先方は、特別な方法で、こちら側のことは、百パーセントとまではいかなくても、六、七十パーセントはつかんでいるのではないか。芦屋の一夜を思い出すたびに、私は今だに落着かない。

□ある現代美術家の非芸術的レポート〈2〉

ウイあるいはノン

河口　龍夫
〈造形作家〉

第八回パリ国際青年ビエンナーレ展の会場は、パリ国立近代美術館とパリ市立美術館、そして隣り合う両美術館の間の野外広場であった。

私の最初の関心としては、パリ市内の見物などよりも日本で十分に構想をねり作品の実現に必要な材料を七分通り用意した今回の出品作品の展示空間を早く見たいことにあった。なぜなら、その展示空間で構想が百パーセント生かされるか、あるいはその一部を変更せざるをえないかもしれないからだ。

行動を開始するにあたって、地理に不案内で、とりわけ言葉に不自由な私たち参加メンバーに、国際交流基金が正木氏という通訳を用意してくれたのは喜びであった。

正木氏は画家には珍しく、きっちりとスケジュールを組み、美術館に、必要な材料の購入場所に、われわれを案内してくれる熱心な協力者となった。

私はまず正木氏の車でビエンナーレ事務局に挨拶に出かけた。そこで昨夜無事着き、現地制作をするので会場を早く見たいこと。日本から送った材料は届いているかどうか聞いた。材料については直接運送会社に行って確かめてくれといわれた。事務局のお偉方はバカンスで八月末にならないと帰ってこないとのことで残念ながら会えなかった。なんとのんびりしていることか、おかげでその日は会場を外からしか見ることができなかった。

数日後、ようやくにして待望の展示会場を見ることができた。私に与えられた展示空間はパリ市立美術館の三階屋根裏で比較的広い空間であった。その会場は今度のために整理改造し白壁で小部屋に区切ったと聞いたが、今だ白壁で区切る作業をしている所や、床が埃で真白くなっていて足跡が残る状態であった。照明の電気工事もようやく始めつつある様子で、一点の作品もなく、ましてセッティングを始めている作家はいなかった。どうやら私たちが一番乗りといったところだ。屋根裏の会場は出品作家がそれぞれ個展が可能なほどの空間で、他の作品に影響を受けずに展示できるよう配慮されていた。私の部屋は変形で一種の扇形をしていたが、広さは私の希望通りほぼ百平方メートルはあった。

私はこのビエンナーレのために三種類の作品を用意した。一つは〈Relation—Energy〉で他の二つは〈Relation—Electric current〉と〈Magnetic World〉であった。題名からも想像がつくように、電気が最も重要なエレメントであり素材の一つであった。ところが私の与

えられた部屋には電気のコンセントがひとつもなかった。そこで通訳を通して展示の関係者と話し合うことにした。

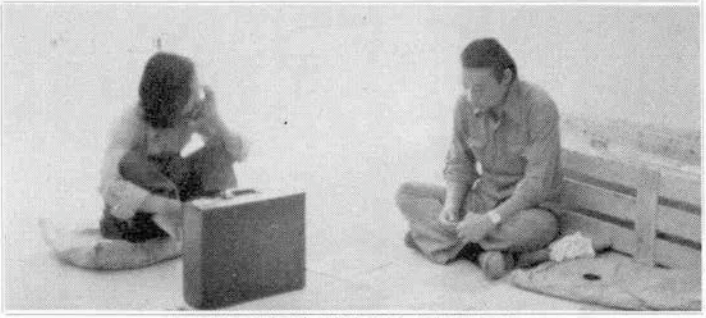
ところで言語の問題は、現代美術にも言語に関わった作品が表われ私もその現象に関心を示す一人であるが、いろいろと困難なものである。私たち日本人はよほどのことがない限り通常日本語という言葉で思考してきた。同様にフランス人はフランス語で思考し伝達してきた。しかしながら、言葉の上で動詞が主語のすぐ後にくる言語民族と最後にくる言語民族とでは永年の間に思考形態に大きな開きをもたらしたのではないか、とすっかり考えさせられることに出合った。

私は展示委員の一人であるムッシュージャコ氏に向って、「事前にスペースと同時に電圧、アンペアについてもつまり電気の必要度を説明しておいたにもかかわらず電気のコンセントの一つもない部屋では困る。しかも電気工事人に聞くと配電には日数がかかるし二百ボルトの配電しかできないといっているが、日本では一般に百ボルトを使用しているため、私が日本で用意した物品もすべて百ボルト用である。したがってこの部屋を使用するには多くの時間を待つうえに変圧器が必要になり大変面倒である。私の作品は展示するのに多くの日数を必要とするので早目に来たし、すぐにでも取りかかりたい。そこで会場を一巡したところ、備えつけのコンセントの用意された部屋で希望通りの広さの部屋があった。しかもコンセントは百ボルトと二百ボルトの二通りがあり、そのまま使用できるので私は大変気に入った。もしその部屋を使用する予定の作家が電気を必要としなくて、私が与えられた部屋と取替えてもよいというならそのように配慮してもらえなえてほしい、その返事がはっきりしてから技術的な問題を解決すればよいではないか」

「私が出した条件が可能であれば使用するし不可能であれば使用しないであろう」

「その条件はどうでもよい。まず使用するかしないかを返事してほしい」

この問答は長々と続いた。私は内心ほとほと弱ってしまった。条件が満たされてこそウイかノンか答えるのが日本人の常識であり、満されないままウイと答えるのは無謀に思えたからであった。一方かのフランス人は、まず使用するかしないか、ウイかノンかを明確に答えてから次の問題を解決しようというのであった。



展示会場で構想をねる筆者（右）と狗巻賢二氏

いだろうか」というと、

「あなたのいうことはよくわかったが、あなたに割当てられた部屋はこの部屋だから芸術上の不都合がない限りこの部屋を使用してほしい。部屋の変更は大変困難であり、最終的にはあなたに与えられた部屋を使用するか使用しないかを答えてほしい」

「それでは、仕方がないので、私に与えられた部屋にもし百ボルトの配電をしてくれるならば使用してもよいがどうだろうか」

「とにかく二百ボルトは近くにきているから配電させる。電圧の問題は技術的な問題であって変圧器を使用すれば解決ではないか、それよりあなたがこの部屋を使用するかしないかを答えるほしい」

「だから、もし希望通りに配電してくれるならば使用してもよい。変圧器はフランスでは高価と聞いているし……」

「いや、まず使用するかしないかだけ答

□いんたびゅう□

私は写真屋

もうひとりのあなたを撮ります

寺山　修司

昭和四十九年十月二十四日から二十九日まで、大丸神戸店にて〈寺山修司幻想写真館『犬神家の人々』〉が開催された。これには、組写真「わたしの少年時代」「南回帰線」、人工調色、部分着色などの技術処理を施した「上海絵葉書集」「魔群の通過」、一般公募モデルによる衣裳倒錯、「二十一面相」、「少女黒ミサ」、コラージュなど多彩な作品群二百数十点が展示された。

最終日、寺山さんにインタビュー、写真についてのアレコレをお話しいただいた。

◇

写真ってのは、今まで全然撮ったことがなくて。カメラというのは難しいですからね。機械に弱いから。

人が撮った写真を見るのは好きだったんですが、機械をいじることにまったく自信がなかったから、まあ、無理だろうと思って最初からあきらめていたんです。

ところが、テレビのコマーシャルでは「私でも写せます」ってやってるので、それなら素人でも出来るのかなぁと、昨年はじめてカメラを手にして、それで、はじめたんです。

◇

写真に撮られたい人は手紙をくれっていうような広告みたいなものを出して、それで、素人の方がいろいろと変装して、こんな風に撮って欲しいとか、いろんなことを、面接してから、撮って、それで、大分たまって、今年（昭和四九年）のはじめに、東京の画廊で展覧会をやったんです。それがはじめてです。

それから、ただ、写真を撮るのじゃなく、それを古い絵葉書みたいなように脱色したり、人工着色したり、外国の切手をとりよせて、昭和の初期の郵便局の消印をつくって押したり、古くなっているように見せかけるためシミをつけたりしてね。そんな感じで、やったやつが、東京ビエンナーレに招待されたりして、それから、京都の藤井大丸で、そっくり東京の画廊でやったものをやりたいっていってきたので持って行って、それで、今回が三度目になります。

やってみたら、写真なんて簡単なものだと分ったんでこれからも撮られるって人がいれば、いつでも撮りますけどね。

◇

昔は写真を撮りに写真屋へ行くと写真屋さんってのが

洋服貸してくれたりして、背景に書割の富士山とかいろんな絵があって、それで、ふんぞりかえって写真を撮ったものでしょう。

ところが、写真家ってのは、だんだんふえてきても写真屋さんってのがどんどん少なくなってきたのですね。写真家ってのは撮る人間が主体的になって、撮られる人間はズッと客体的なんですね。写真屋さんの世界だと撮られる人が主人公で撮る人はそれにサービスさせられて僕はだから写真屋さんになろうと思っているんです。写真家じゃなくってね。

◇

「上海絵葉書集」についてですか。いやぁ、あれはデタラメで、消印が上海になっているだけです。別に意味はないですけどね。

ただ、要するに写真屋さんの全盛時代ってのは、ちょうど大正から昭和にかけて日本の景気がよかった頃で、西洋の文化が日本にドドッと入ってきた頃ですね。その頃、日本は上海を一種の植民地化していて、そういう、何というかなぁ、あの景気のよかった頃には〝上海帰り〟ってのがあって、それがなくなっちゃって、終戦後には、「上海帰りのリル」って歌がはやりましたけど、そういう郷愁みたいなものですね。

◇

こういう形での展覧会の予定はあとないです。今度、読売新聞社から写真集が出るんですよ（寺山修司幻想写真館「犬神家の人々」として）。今、印刷所に入っているんですけど出るのは年末ぐらいだと思います。

それが、実質的に写真がはじめて印刷され、市販されるわけで、どうせ、アマチュアですからね。それは、遊びみたいなもので、撮られたいとか、撮ってとかいう人がいたら撮って、計画的に今度はいついつまでにこういうものを撮るということを別に考える必要はないのです。

◇

今、映画「田園に死す」を撮っているんです。あさってクランクアップで、今、撮影の最中なんです。アートシアターの系統の映画館で十二月末からお正月にかけて封切られます。これは脚本を書いて監督をしています。劇映画をつくるのは二本目（一本目は「書を捨てよ町へ出よう」）なんですよ。小さい、十六ミリの実験映画は何本かありますけれども。

内容は、一人の少年のおいたちを撮った映画なんですが、ちょっとグレて家出したり、サーカスに入ったり、女の人とかけ落ちしたり、そういう少年時代の出来事を映画にしたものなんですが、子供、少年がやっているわけです。

で、前半はそういう形の映画になってて、途中で、成長した、大人になった自分が見て、少年時代はそんなにこう何か抒情的でキレイなものだったのだろうかと、もう一ぺん過去を組み立て直して、現実を振り返って、二十年後の自分が、二十年前の少年時代に入って行く、そういう映画なんですよ。

◇

奇妙な世界ですからね、写真って。写真機一台持っているだけで、いろんなことが許されますね、他人に。初対面の人に近づいて行ったり、裸の女の人に一対一で向き合っていても写真機があれば客観的な関係が保てるし高所恐怖症の人でもファインダーからのぞいて高いところへあげるとちっとも恐くないようですね。カメラを持っているだけで、現実ってものが全然違ったものになってくる。面白いですよ、写真って。不思議なものですね。

◇

要するに写真ってのは、出来上ったものじゃなく、撮るってことが面白いのですね。ドラマみたいなものですからね。その興味ですね。僕は人間にしか興味がないですね。撮られたい人がいて、こういうのを撮ってくれってったらそれを撮りますね。

MAKE UP WITH ROYAL

迎　春

ドイツを主としてヨーロッパ製枠を
多数コレクション致しました。
年の始めをすがすがしい装いで
迎えましょう。

神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表
三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874～5

元町店は毎水曜日がお休みです
三宮店は第2、第3水曜日がお休みです

刀剣 古美術
書画 骨董

木村友敬作（高さ58㎝）

▼備前布袋（ほてい）置物　一九〇、〇〇〇円

鑑定　買入
研 白鞘 拵 御承処

神戸市生田区元町通6丁目25番地

刀剣 古美術 骨董
元町美術

〒650　TEL078-351-0081